

# 私の家族は ハイスペック です！4

落ちこぼれ  
★転生末姫ですが  
溺愛されつつ世界  
救っちゃいます！



著りーさん

Illust. azな

## ◆ 主な登場人物 ◆

### ◆ カイエン ◆

アナスタシアの側近。  
学力も魔法もトップクラスだが、  
なぜかその実力を隠している。



### ◆ ルージア ◆

カイエンの腹違いの姉。  
傲慢な性格で、  
カイエンを虐げている。



### ◆ リチャード ◆

カイエンの腹違いの兄。  
フォークマー伯爵家の長男。  
目的のためなら  
手段を選ばない。



### ◆ ライ/神雷の金剣 ◆

女神より与えられた神器。  
本性は剣だが、姿を変えて  
アナスタシアの側にいる。



### ◆ アナスタシア ◆

本作の主人公。  
魔力なしの落ちこぼれ転生末王女。  
女神の頼みで、各地に散らばった  
神器を密かに集めることに。



### ◆ 投影の魔鏡 ◆

人に下賜された後、  
女神のところに戻っていない  
神器の一つ。  
自分の望む景色や人物を  
映し出す能力を持つ。

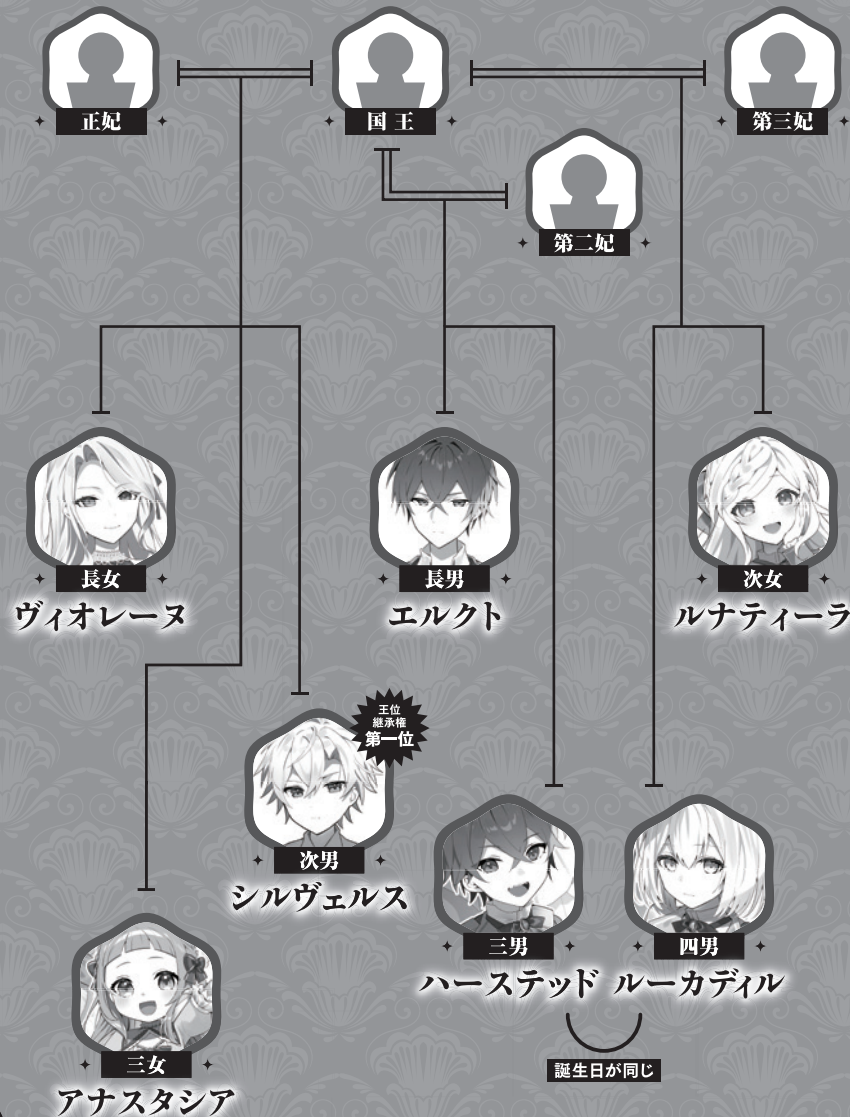


### ◆ キウ/吸魔の指輪 ◆

王宮の歴史書に載っていた、  
女神の手元に戻っていない神器の一つ。  
性格面で他の神器たちと  
相容れない様子。



## アルヴェルト王家 系図



### プロローグ 側近の苦悩

王女アナスタシアが兄や姉と共に地方視察に向くことは、側近のカイエンの耳にも届いていた。アナスタシア本人から伝えられたというのもあるが、城から、それゆえにその間は登城を控えるようにという通達があったのだ。アナスタシアの側近とはいえ、カイエンはまだ六歳ということもあり、視察には同行しない。

カイエンは今、久しぶりに父のいるフォークマー伯爵邸の、自身に与えられた離れの一室に籠っていた。

アナスタシアの側近となってからは、父が抑止力となっているのか、異母姉のルージャに呼び出されることもなくなり、わりと平和な日々を送っていた。

そんなある日、カイエンのもとにある人物が訪ねてくる。

「カイエン、入るぞ」

「どうかしましたか、兄上」

ノックをすることもなく無断で部屋に入ってきたのは、異母兄であるリチャードだった。なお、彼とルージャも母は違っている。

ルーシア以外の兄弟はあまり自分とは関わりたがらず、離れに訪ねてくることはまずない。だから、彼が突如として訪ねてきたことを、カイエンは訝しんだ。

「父上がお呼びだ。ついてこい」

「かしこまりました」

わざわざそれだけのためにここに来たのかという疑問は浮かんだものの、彼らには従順であったほうがいと学習しているカイエンは、その疑問を口にすることはなかった。

◇ ◇ ◇

カイエンは、リチャードと共に伯爵の執務室に来た。ここへはアナスタシアの側近になったことを報告して以来、足を運んでいない。

「父上、リチャードです。カイエンを連れて参りました」

「入れ」

部屋の主からの入室の許可を待つて、リチャードは中に入る。さすがに彼も、伯爵に自分と同じ対応はできないのだろうかと考えながら、カイエンも続いて入室した。

「父上、何かご用でしょうか」

カイエンが伯爵に尋ねる。

「お前にはリチャードと共に領地に向かってもらう」

カイエンはリチャードのほうに視線を向ける。

（この人と領地に？）

リチャードはまだわかる。フォークマー伯爵家の長男であり、第一夫人の息子である彼は、跡継ぎの筆頭候補であるからだ。だが、跡継ぎの資格もない妾の子である自分まで、なぜついていかなければならないのか。

自分を行かせるくらいなら、もう一人の兄や姉でもよいはずだ。

「カイエンを連れていく理由をお尋ねしても？」

リチャードも同じ疑問を抱いたようで、伯爵に尋ねる。

「今回の王族の地方視察には、アナスタシア王女も同行するからだ。側近が出迎えぬわけにはいかんだろう」

外面を気にする父らしい理由ではあるが、カイエンの心境としては複雑だった。

別に出迎えるのは構わない。だが、リチャードと共にというのが気にかかる。

カイエンは、ルーシアを除いた兄妹たちとはあまり関わりを持っていないが、ある程度の人となりは掴んでいる。お陰で大きなトラブルを起こしたことはなく、お互いに同じ敷地にいるだけの他人のような関係を維持していられた。だが、リチャードは考えがよくわからない。

気まぐれに自分を可愛がったり、勉強を教えてくれたり。かと思えば、部屋の掃除を言いつけた

り、魔法の実験台にされたり……と、言動に一貫性がないのだ。そのため、カイエンがフォークマー伯爵家で一番恐れている相手だった。

「一つだけ確かなのは、目的のためならば手段を選ばないことだろうか。自分の目的に近づけるのなら、憎い相手にも愛想を振り撒くし、同じ派閥の間でも蹴落とすことがある。

そんな相手と一緒に王族を迎えろと言われても、カイエンにとっては負担ではない。

別に他の王子や王女のことは気にしていないが、アナスタシアに手出しする可能性がある。カイエンの主という点だけでも、リチャードの興味を引くのに充分なはずだ。

「かしこまりました。ただちに支度をして参ります」

だが、カイエンに断るという選択肢はない。リチャードが彼女に対して手出しをしようとするのなら、自分が守ればいいだけだ。

「では、私もこれにて。明朝の出発でよろしいでしょうか」

「構わん。王族を迎える以上、できることはすべてしておけ」

伯爵の執務室から出て、離れに戻ろうとするカイエンの背後から視線を感じる。

相手をしなければならぬのかと心の内でため息をつきながら、カイエンは振り返る。

「まだ何かご用でしょうか」

「いや。時間に遅れることのないように祈っていただけだ」

「時間は守ります」

カイエンは再び前を向いて歩き出す。

しかし、リチャードがそんな理由で自分を見ていたはずがないと無意識のうちに思っていたからか、続けて聞こえてきた「だが」という呟きにカイエンの歩みは止まる。

「お前のその言葉は本当なのかわからんな」

「……私は兄上に嘘を申したことはございませんが」

「そうか？」

リチャードはだんだんとカイエンに近づき、間近まで来ると、カイエンの瞳を覗くように見下ろした。

「お前の魔力は弱くなどないだろうか？」

カイエンにしか聞こえないほどのささやき声で、リチャードは尋ねる。

「どういう意味でしょうか。私は——」

「無能者と呼ばれている……か？　だが、実際のお前は無能ではないだろう」

カイエンは口にしようとしていた言葉を飲み込み、口を閉ざす。

リチャードの様子を見るに、自分が力を隠していたことを確信していると見て間違いない。この兄に下手なごまかしが通じないのは、カイエンが一番わかっている。

「ルーシアのこともあるからな。無能であったほうが都合がいいのはわかる。私にとってもそうだ」

「……では、構わないではありませんか？」

「ああ。だが、その力を使わないというのも実に惜しい」  
この後に続く言葉を予想して、カイエンは身構える。

「私のために使ってもらおう。そうすれば、お前が力を隠していることは誰にも話さん」

予想通りの言葉だった。手段を選ばないリチャードからすれば、利用しようとしている相手が妾腹の弟であることなど気にならないのだろう。

「……別に構いません。誰に知られたとしても、大したことでない——」

「アナスタシア王女にもか？」

リチャードの言葉に、カイエンの表情が強まる。それを見逃すリチャードではなく、手応えを感じたかのようにニヤリと笑う。

「お前がどのような意図をもってあの王女の側近になったかは知らないが、あの王女もアルウエルトだ。無能であっても、愚かではないだろうからな。お前を信用しているからこそ、側近に迎え入れたのだろう」

側近に関してはアナスタシアのほうから提案してきたことだから、自分が断れるはずはないのだが、それを指摘したところで、リチャードにとっては些細な問題だろう。

信用していない人間にはそもそも提案しない、と返されるにちがいない。

「そんなお前が自分に隠し事をしていたことをあの王女がどう思うかは、私よりもお前のほうが想像がつかうだろう？」

「アナスタシアさまはきつと……氣にされません」

アナスタシアの前では、あまり力を抑えていない。むしろ、魔法の授業での魔法の行使や、魔力石の件、魔力移しで、カイエンの実力には気づいているだろう。

自分には魔法の実力があると話したところで、アナスタシアはやっぱりと納得するだけだ。

「ならば、なぜ王女に明かさない？」

「聞かれていませんから」

「つまり、自分から告白するつもりはないということか。それが側近としてあるべき姿と言えるのか？」

「それは……」

カイエンは言葉に詰まる。リチャードはさらにカイエンに近づき、肩に手を置く。カイエンは体をふるりと震わせた。

「言えればいいだろう。私たちに目をつけられないために無能を演じていたと。そうして、王女から憐れまれるといい。心優しいと聞く王女ならば、孤独感よりも情けの気持ちのほうが強くなることだろう。お前を責めることはない」

リチャードの言う通りだ。アナスタシアが自分を責めることはないはずだ。

ならば、話しても問題ない。問題ないが……

「……何を、お望みなのですか」

カイエンの口からは、リチャードの提案を受け入れると取れる言葉が出た。ほぼ無意識であったが、カイエン自身も、なぜそのような言葉が出てきたのかよくわからない。

「私の話を聞く気になったか？」

「……話を聞くだけです」

「ならば、共に離れに行こうか。ついでに荷造りも手伝ってやろう」

「ありがとうございます、兄上」

朗らかな笑みと口調で話しかけてくるリチャードと共に、カイエンは離れに戻った。

## 第一章 枯れた湖

ロニスニルでのソウルイーターの騒動も一段落し、私——アナスタシアたちは次の街のサウクシアに移動することとなった。

お兄さまたちは、後始末を領主に押しつけたようだ。これ以上視察を遅らせるわけにはいかないという素晴らしい理由で。でも本音は、視察そのものをさっさと終わらせたかったんだと思う。

今日の馬車に私と同乗しているのは、エルクトお兄さまとハーステッドお兄さまだ。

「サウクシアって、どういうところですか？」

ただ黙って揺られるのも嫌だったので、次の街のことを話題に出すと、ハーステッドお兄さまが答えてくれる。

「普通の街だけど、近くに大きな湖があるよ」

「湖ですか？」

ちょっと見てみたいような気もするけど、湖と一言で言っても、いろいろあるからなあ……  
どこなどころだろうか。

すると、エルクトお兄さまが補足してくれる。

「森の中にある湖だ。一年中花が咲き乱れていて、絵画のようだと話題になっているらしい。貴族はサウクシアを訪れたら、必ず湖を見に行くそうだ」

「そうなんですか」

わあーと感傷に浸りかけたとき、エルクトお兄さまの言葉の違和感に気づいた。

「まるで人づてに聞いたかのような言い方ですね」

「俺自身は見たことがないからな」

エルクトお兄さまは、さも当然のように言う。

「えっと……お兄さまは、視察は初めてじゃないですよ？」

「これで四回目だ」

「サウクシアに行ったこともありますよね？」

「視察のときは毎回通るからな」

「それで、湖に行ったことないんですか!？」

いくら公務のためとはいえ、ちよつとの観光は許されると思うんだけど。

「行く必要がないだろ」

何を言ってるんだ的な目で見られているものの、その目をしたのはこっちだ。

「いや、話題作りとかできるじゃないですか」

人から聞くのと実際に見るのとは全然違うんだよ。だから、みんなは旅行して現物を見に行くん

だつて。

それに、貴族の間で流行っているなら、社交のときに話題に出せそうな気がする。

「なぜあんな煩わしい連中と、俺たちが話題を提供してまで会話をしなくてはならないんだ」

「それに、わざわざ話題を作らなくても、向こうが勝手に話し出すから必要ないし」

エルクトお兄さまの言葉に、ハーステッドお兄さまが援護するように同意する。

いや、あなたたち、貴族のことも嫌いなのか？

……そういえば、エルクトお兄さまに婚約者がいない理由を聞いたとき、『まともなのがいない』つて言ってたな。

身内も気に入らない、貴族も気に入らない、平民はどうでもいい、でよく国を統治できるな。何にも思い入れがないからこそ、一方にとつて過剰な政治をするようなことがないのかもしれない。

ただ、だから王位にもこだわりがないのかなあ。

「でも、アナが見に行きたいなら行くよ？」

「ハーステッドお兄さま、本当ですか？ 見たいです!」

あくまでも視察だから、はしやぎすぎるのはよくないけど、ちよつとの観光ならね。というか、みんなも私が視察の役に立つとは思ってないだろうし。

湖、楽しみだな。

◇ ◇ ◇

サウクシアに到着！ 距離にして一日分しか離れていないせいかな、前のロニスニルと雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>気<sup>き</sup>はあまり変わらない。

領主への挨拶<sup>あいさつ</sup>を早々に終わらせて、すぐに湖に向かうことになった。今から向かわないと、帰る頃には夜になってしまうからだとか。

「湖って遠いんですか、ハーステッドお兄さま？」

「距離はあまり離れてないけど、馬車だと途中までしか入れないから、歩くか魔法で飛んでいくしかないんだよね」

「なるほど」

飛行魔法が使えない私は、抱っこされるか歩いていくしかないということか。

ついてきてくれるのは、引き続きハーステッドお兄さまとエルクトお兄さま。どちらも風魔法が使えるから、抱っこされるのはどちらでもいいな。

私たちが湖に行くとなると、他の兄妹たちもついてきたがっていたけど、ハーステッドお兄さまが頑<sup>かた</sup>なに譲らなかつた。

ロニスニルではルナティーラお姉さまとルーカディルお兄さまが一緒だったんだから、この街で

は自分とエルクトお兄さまが、という理屈で。

まあ、ただ独り占めしたいというよりは、建前でも理由があるだけいいかもしれない。その理由も暴論というわけではないし。

「じゃあ、ハーステッドお兄さまが連れていってください」

「うん、いいよ」

エルクトお兄さまは私を荷物のように持ち上げるからね。あんな持ち方は二度とされたくない。

「じゃあ、しっかりと掴まって」

「はこ」

私はハーステッドお兄さまの首に手を回す。お兄さまは私を下から持ち上げてお姫さまだっこしてくれました。

いざ、湖へ！

◇ ◇ ◇

ハーステッドお兄さまに抱えられて空を飛び、目的地の湖に到着——したはずが。

「あの……私の視界には、湖ではなく大穴が見えるのですが」

「大丈夫。僕たちも同じだから」



それは大丈夫じゃないですよ、ハーステッドお兄さま。でも、私の幻覚というわけではなくて、ほっとした。

そう。私たちの目の前には、謎の大穴が広がっている。おそらく、以前はここに水が溜まっていた、湖と呼ばれていたのだろう。

周囲の草花も踏み荒らされている。色合いが赤いからフレイアかな？ ルーカディルお兄さまが見頃だと言ってたんだよね。

そのとき、エルクトお兄さまがぼつりと言った。

「妙だ」

「そりゃあ、湖の水がなくなってますから……」

何を当然のことを、と思っていると、エルクトお兄さまは「そうじゃない」と否定する。

「この大穴の中には、何も残っていない。水草も、水中の生き物もないだろう」

「ええっ!？」

私は穴の近くに寄って覗き込む。確かに、水草や生き物の死骸しがいのようなものは見当たらなかった。言われなければ、ここが湖だったなんて思えない。

それなら、湖はただ干からびたわけではないようだ。

まゝた神器じんぎが関わってるんじゃないだろうなあ？

『やつらも、さすがに連続して問題を起こすことはねえだろ』

『僕もそう思う』

神器『神雷の金剣』——ライト、『神聖なる水鏡』——ペンダントがそう言うなら信じるか。

でも、神器じゃないなら何が原因なの？ さすがに人災ではないと思う。人災だとしたら、こんな芸当ができるのはアルウエルト王家くらいだろうけど、当の本人たちが知らないって言ってるし。それなら、魔物か何かだろうか。ソウルイーターみたいな魔物がいる世界なら、湖を跡形もなく消すことができる魔物もいそうな気がする。

『いや、おそらくそれはない』

私の考えを、すぐさまペンダントが否定する。

『どうして？』

『銀鐘が魔物をロニスニルに誘き寄せていただろう。それなら、この周辺に魔物はいないはずだ。近場から呼び寄せただろうからな』

『ああ……なるほど』

あのときはかなりの数の魔物がロニスニルに押し寄せてきていた。あの魔物が周辺から集められたのだとするなら、この湖周辺の魔物も誘き寄せられたにちがいない。

なら、魔物ではないのか。だとすると、ますますわからない。

「一度戻るぞ。他のやつらにも情報共有をしたほうがいい」

「まためんど——大変な事態に巻き込まれたね」

ハーステッドお兄さま、面倒って言いかけませんでしたか？ 気づいて修正したみたいだから、

何も言わないけど。

「ほら、アナ。行くよ」

「はーい」

とりあえず、帰って作戦会議だな。

◇ ◇ ◇

屋敷に戻った私たちは、留守番していたお姉さまたちに事の次第を説明する。すると、全員がため息をついた。

「今回の地方視察は、行く先々で問題が起きるわね」  
ルナティーラお姉さまが、はあとため息をつく。顔のパーツが整っているから、その姿すらも絵になってる。

問題が起きてるのは、私を連れているからのような気がするけどね。美食の街のやつは、神器が原因だったし。

でも、今回はきつと無関係だ……きつとね。

「この街の領主から、湖のことは聞いていないか？」

エルクトお兄さまに、ルナティーラお姉さまが答える。

「いえ、最近湖のほうに行く者がいなくなったとのことで、それを聞いて、私はびっくりした。」

「えっ？ あそこって観光地なのでは？」

湖なんて一年中見られるし、観光地なら客足が途切れるなんてことはないと思う。

馬車が通れないというだけで、歩いていくことはできるだろうし。

「ええ。でも、人が寄りつかなかったんですって」

「理由はお話ししてくれなかったんですか？」

ルナティーラお姉さまは私に対して、こくりと頷く。

うーむ。怪しいなあ。何か隠しているのかなあ。

観光地がダメになったこと以上に不都合なことがあるのだろうか。

いやでも、本当に把握していないだけかもしれない。

「では、私たちが調べてみましょう！」

まだ、神器が関わっていないと断定できるわけではなさそうだし、しっかりと調べなければ。

まずは街の人たちに聞き込みをして、もう一度湖をしっかりと調べよう。何か手がかりが残っていたかもしれない。

「でも、これ以上視察の日程を遅らせるわけにはいかないのよ。それに、本来は領地の問題は領主

が解決すべきだから」

美食の街とは訳が違うと、ルナティーラお姉さまに突き放される。

でも、お姉さまの言うことも一理ある。

塩の買い占めの件は、他の街にも関わっていることや、領主も把握していたけど解決できていなかったことから、王族が介入してもおかしくはなかった。

でも、今回は事情が異なる。

それに、この視察のそもそもの目的は魔力枯渇事件を調べることだ。時間が経つと痕跡は残らなくなっていくものだし、私の使命とも深く関係していることだから、後回しにし続けるわけにはいかない。

でも、なんかモヤモヤするんだよなあ。これはそのまま放っておいていいものじゃないような気がするならない。

それに、美食の街では美食を味わえなかったから、この街のきれいな湖くらいは見たい！

『そっちが本音だろ』

ペンダントがツツコミを入れてくる。

『そ、そんなことないよ？』

ちよっぴり。ちよっぴりそんな気持ちがあるくらいで、嫌な感じがしてるのも確かなんだから。

私のこういう直感によく当たるんだよ。

『当たつてるところ一回も見たことないんだけど』

『俺も』

『ペンダントもライも、なんてことを言うの〜!』

そんなに言うなら、私の直感が合ってるかどうか、確かめようじゃないか！  
湖をしっかりと調べて、手がかりを見つけてやる！

『なんの会話してるかは知らんが、そろそろ百面相はやめておけ。やつらが怪しむ』

エルクトお兄さまの声が突如脳内に響き、私はこの場に他の兄妹たちがいたことを思い出す。

兄妹たちは口にこそ出していないものの、何してんだこいつ？ 的な顔で私を見ている。

ヤバイヤバイ。ただでさえヴィオレーヌお姉さまにはほとんど勘づかれてるのに、これ以上そんな相手を増やすわけにはいかない。

「で、では！ 私は湖の調査に行つてきますす！」

「ちよっと！ それはまだ許してな——」

ルナティーラお姉さまが引き留めようとしていたけど、私は逃げるようにして部屋を出た。

◇ ◇ ◇

そんなわけで再び湖へとやってきた！ ……エルクトお兄さまと共に。

うん。ろくに魔法を使えず、足が速いわけでもない私が振りまけるはずがなかったし、一人にしてもらえないはずもなかったよ。

私が歩いて向かおうとしているところを捕まつて、ここまで運ばれました。そう、まるで荷物のように。

めちゃくちゃ怖かったよ！ やめてつて言つてもやめてくれないもん、この人。屋敷に連れ戻されなかっただけマシかもしれないけど。

「でも、なんで他の人たちは来なかつたんですか？」

兄妹たちの中で風魔法が使えないのはシルヴェルスお兄さまとルナティーラお姉さまくらいで、他は使えるから、エルクトお兄さまと同じように簡単に追いつけるだろう。

「他のやつらは街の住民への聞き込みに行かせている。ハーステッドはシルヴェルスと共に領主を尋問しているだろうが」

ハーステッドお兄さまの闇魔法は精神に干渉することができて、精神を操つて相手を自白させられる……らしい。

らしいというのは、私がある場面を一度も見たことがないから。使用人たちもあまり話しながらないので、想像しないほうがいいことであるのは確かだ。

「ちよっと領主が可哀想な気がします」

王族に嘘をついたとかならともかく、本当に湖の異変を知らなかったのなら、お兄さまたちの行

いは領主にとつては拷問でしかないだろうし。

「無能にかける情けはない」

湖の異変に気づかなかったから無能扱いつてこと？

それはさすがにひどすぎませんか!?

そりゃあ、ハイスベックなお兄さまたちからすれば、ほとんどの人が無能でしょうよ!

「つまり、私にも情けはかけないってことですな」

私も魔法がろくに使えない落ちこぼれの無能な王女さまですからね。お兄さまの理屈では情けをかける対象ではないだろう。

「お前は別に無能ではないだろう」

エルクトお兄さまのその言葉に、嘘は感じられなかった。そもそも、エルクトお兄さまはお世辞を言うタイプではないので、私が無能ではないというのは本当に思っていることなんだろう。

でも、なんで？

「神器があるからですか？」

「それはお前の力ではないし、力を持っていても無能なやつはいる。俺の言っていることは、そういうことではない」

ならどうということなんですかね？

中身の話だとしても、私はあまり褒められたものではないと思う。自分では考えて動いているつ

もりでも、結局は周りを振り回しているし、エルクトお兄さまに関しては神器のことでたくさん迷惑をかけているし。

そんな私よりも、領主のほうが無能なんですか？ 私が知らないだけで、領主が何かやらかして

るのかな。

「それより、手がかりを探すんじゃないのか？」

「あっ、はいー」

お兄さまの言葉で本来の目的を思い出した私は、湖の周辺をくまなく探し回る。

ひとまず踏み荒らされている場所を探したけど、特にめばしいものはない。なら、あとは湖があったと思われるあの大穴だけだ。

私はまずは穴のふちに腰かけ、少しずつ足を前に進めて、慎重に穴の中に入っていく。

ズルズルと引きずるように降りたから服が汚れてしまったけど、怪我をすることなく下まで降りられた。

地面を触ってみるも、表面は乾燥していて、水があったとは思えない状態だ。なんか、砂場の砂みたい。

花が踏み荒らされていた場所とは違い、本当に何も無いから、何かあればすぐに見つかりそうだ。

(……うん?)

キョロキョロとあたりを見渡していたら、何かがキラリと光った気がした。

私がそちらのほうに駆け寄ると、ピンポン玉くらいはありそうな黒くて球体のものが落ちてい  
石にしては大きいし、他に似たようなものが見当たらないし、形が整いすぎて自然物には見え  
ない。

お兄さまなら何か知ってるかなと思って、拾い上げようとしたそのとき――

『触るな!!』

「ひゃあっ!」

突如として脳内に響いた声に驚き、私は変な声を上げて尻餅しりもちをついてしまう。

今の声は……ライ?

「どうした、アナスタシア」

「あつ、お兄さま……」

おそらく、私のあの恥ずかしい悲鳴を聞いて来たのだろう。いつの間にか、エルクトお兄さまが  
私のそばにいた。

「この黒いものを拾おうとしたら、ライが止めてきて……」

「当たり前だ」

声が聞こえたほうを見ると、いつの間にかライとペンダントが人間形態で立っている。

「お前がこれに触ったら、最悪の場合、爆発して消し飛んでたぞ」

ライがそう言った。

「ええっ!?!」

この黒いピンポン玉、そんな危険物なの!?! ……あれ? ……あれ? ……とか、その話、前にどこかで……?

「君の側近が森で触ったやつのことじゃない? 同じやつかもしれないな」

「ああっ!」

ペンダントの言葉で完全に思い出した。カイエンが学園の森で怪我をしたときに見つけたと言っ  
ていたものだ。

ライやペンダントが知ってるってことは、神器関連か。指輪とかがちよっかいを出してきたって  
ことかな。

「いや、これを落としたのは、あんなやつよりも数倍は厄介やっかいなやつだ」

「数倍どころじゃないだろ」

「ど、どんなやつなの?」

指輪も森を消し飛ばせる魔法が使えて、空間移動ですぐに逃げられるから厄介なのに、それ以上  
だと?

「墮ちた神器」

墮ちた……神器?

なんか物騒なワードが出てきたぞ。墮ちた神器って、字面じづらだけでもヤバイ感じがする。

「それって何?」

「完全に女神であるリルディナーツさまの管理下から外れた神器のことだ。落ちる理由はいろいろあるが、一度落ちたら戻ることはない」

「管理下から外れると、リルディナーツさまの力の制限を受けないから、強さも桁違いだ。白金級よりも上になることもある」

「白金級よりも!？」

白金級って、神器の強さの階級で一番上のやつですよね!？ それよりも上って、ライとペンダントだけじゃ敵わないんじゃないや……

「ああ、間違いないで負ける」

「時間稼ぎにもならないだろうな」

わかっていただけけど、ばつさりと切り捨てられた。

今まで神器を相手にしていたときにそんなことは言わなかった。厄介とか面倒とか言うことはあっても、勝てないと言うことはなかった。

「これは、リルディナーツさまへの相談案件なのでは?」

「それはそうなんだが……落ちた神器がどこにいるかわからない以上、報告してもリルディナーツさまも何もできねえと思う」

確かに、ライの言う通りかもしれない。落ちた神器を見つけて対処ができるなら、私に神器回収を頼むことなんてしないだろうしね。神器がリルディナーツさまの管理下にあるといつても、常に

居場所を探知できるというわけではないはずだ。

でも、報告するべきではあるだろう。この近くに神殿ってあったかな。

「報告は好きにすればいいが、落ちたやつとは極力関わらないほうが君のためだ」

「話を通じるとは思うんじゃないやねえ。神器の主であるお前の言葉はまず聞かねえからな。問答無用で殺しにかかってくる」

ペンダントやライが神器に関することで大きさに言うことはない。だから、私に関わらないほうがいいのは確かなのだろう。でも……本当に、それでいいのだろうか。

落ちた神器なんて、放っておいていい存在ではないのは間違いないのに。でも、だからといって私に何かできることはないだろう。ならば――

「……その落ちた神器っていうのは、この辺にはいない?」

「いねえと思うが……それがどうした?」

ライが訝しげに答える。

「じゃあ、湖の問題は解決できそうだよね!」

ライたちが言うなら、私も落ちた神器のことは探らない。でも、それと湖の問題はまた別だ。それに、もしかしたらということもあるし。

「おい、もしかしたらってなんだ」

「君の思考は、僕たちに筒抜けなんだからな。よからぬ企みがあるならやめておけ」

ライとペンダントが探りを入れてくる。

「な、なんのこと〜？」

大したことはないよ、大したことはね。堕ちた神器と関わるつもりはないから安心したまえ。

それにしても、改めて言われると理不尽だな。私の思考は簡抜けなのに、ライたちの思考は私にはわからないんだから。

「別に全部見えてるわけじゃねえよ。現に、お前の悪巧みわるたくの全容はわからねえし」

「悪巧みじゃないよ！」

別に私が何かしようってわけじゃない。もし向こうが動いたら、というだけのことだし、可能性はあまり高くない。

「向こうが動くって、何？」

「高くなくても可能性としてあるんなら話しておけ」

ペンダントとライが詰め寄ってきた。

「だから、大したことじゃないってば！」

「大したことねえんなら話せるだろうが」

「そうだ。この場で話さないなら、話すまで念を送り続けることになるけど」

それって、私の脳内にとずっとペンダントたちの催促さいそくの言葉が響くってこと？ それは勘弁かんべん！ 脳

内にとずっと声が響くのってすごいストレスなんだよ！ 神器の脳内会話はシャットアウトできな

いし。

夜もずっとされたら眠れなくなる！

いつもなら私の思考を深掘りすることなんてないのに、なんで今回はこんなにしつこいんだらう？

私が堕ちた神器に関わろうとしていると思ってるんだとしても、そこまでのことなのかな？

呆あきれられでもしたら嫌だったから話したくなかったけど、私の心の安寧あんねいのためにも仕方ない。

「動くかなって思ったの」

「何が？」

「指輪たちが動くかなって。魔鏡とかいうので私たちを見てるなら、堕ちた神器のことを私たちが通じて知ってもおかしくないわけだし」

理由はよくわからないものの、ペンダントを狙ってきたということは、向こうも神器を集めようとしているのだ。

それなら、堕ちた神器のことを知れば、よくも悪くも放っておくことはないんじゃないかと思う。さすがに味方に引き入れようとは考えないと思うけど、対処しようとする可能性はあるんじゃないかな。

「可能性はある。だが、自分から首を突っ込みに行くことはねえと思うぞ」

「向こうにどれだけの神器がいるか知らないけど、堕ちた神器を相手にできるほどではないと思

うし」

それができるならとづくに自分は連れていかれてると笑うペンダントに、私は妙に納得してしまふ。

なら、私の考えた「もしかしたら」というのは、実現する可能性は低いのか。でも、動向を探るくらいのことはするかもしれない。

よし。それなら、当初の予定どおり湖の問題だけ解決して、さっさと退散するとしてよう。

水魔法で満たすのが簡単だろうけど……ここにはこの大きな穴を満たせるほどの水魔法使いはいない。

それに、満たせたとしても、枯れた原因がわからなければまた枯れてしまうかもしれない。

「ねえ、湖が枯れたのって、これが理由とかだったたりしない？」

私はライたちに触るなど言われた黒い球体のものを指差す。

「まあ、関係はあるかもな」

ライの言葉に、私はルナティーラお姉さまのあの言葉が脳裏をよぎる。

『今回の地方視察は、行く先々で問題が起きるわね』

今回は関係ないと思ってたけど、ごめん。湖が枯れたのも神器関連だったかも……！でも、私自身は関係ないと思うからね、うん。黒い球体は湖と関係なくただ落ちてただけで。

「そもそも、この黒い球体はどんなものだ？ 落ちた神器とやらとなんの関係がある」

今まで口を挟まなかったエルクトお兄さまが口を開いた。

「これは黒結晶だ」

ライがようやくこの黒い球体の名前を覚えてくれる。

「うん……なんて言えばいいかな……落ちた神器から溢れた力が結晶化したもの……って言えばわかる？」

ペンダントはなぜか私を見ながら聞いてくる。おい、バカにしてんのか。

「お前の理解力がねえからな」

「むう……」

そんなことはないと思いたいけど……なぜかライに言い返せない。すると、ペンダントが口を開いた。

「話を戻すが、黒結晶は生き物が触れると大体は最終的に爆発する」

「大体ってことは、そうじゃないときもあるの？」

「黒結晶は神器の力が込められたものだからな。神器の力から大きく外れるようなことは起きねえんだ」

うん……ライの説明だけでは、よくわからないな。神器ってそれぞれ能力が違うのに、どうして大体は最終的に爆発するんだろう。

「爆発っていうよりは、押し込められてた力が外に飛び出すっていう表現のほうが正しい。だから、

攻撃能力を持たないやつ……君の知ってるやつだと、魅惑の銀鐘とかのものなら怪我はしないと  
思う」

「まあ、ありとあらゆる生き物を魅了するようになるだろうけどな」  
ペンダントとライが教えてくれた。

でも、それはそれで嫌だなあ……魅惑の銀鐘は魔物すらも操れていたから、魔物も引き寄せそ  
うだもん。

「なら、この黒結晶とやらに込められている力の正体がわかれば、堕ちた神器の正体もわかるのか」  
「理論上はな。だが、それはまず不可能だ」

エルクトお兄さまの推察は、ライによってすぐさま否定された。

ライの言葉をペンダントが補完する。

「黒結晶の力は、僕たちには感知できないんだ。ちなみに、堕ちた神器も同じく感知できない」

「えっ、そうなの!？」

神器は神器の気配を感じ取れるから、堕ちた神器のことも感知できるものだと思うんだけど  
ど……

「それは、お互いにリルディナーツさまの管轄内であって繋がりがあるからできること。堕ちた神  
器は管轄から外れてるので、感知できない。向こうも僕たちのことは感知できないだろうけど」

ふーん、神器の感知はそういう仕組みだったのか。それなら、指輪たちも感知できないってことか。

「まあ、僕たちはできないってだけで、リルディナーツさまはできるかもしれないし、持っていて  
あげれば?」

「いや、私が持つてくと危ないんじゃないの?」

「ああ……『押し込められていた力が外に飛び出す』って言ったが、その前に触れた生き物の魔力  
を可能な限り吸い取るんだ。正直なところ、魔力量の少ないお前の場合は、爆発する前にぶっ倒れ  
て終わるんじゃないかねえか?」

いや、ライ……それはそれで危ないし、ぶっ倒れたら持つていけないでしょ!

「まあ、こいつは俺がリルディナーツさまに渡しておく。城では脱走扱いされてるだろうし、そろ  
そろ戻らねえとな」

「あつ、そういえば……」

普通に話してたけど、ライは本来なら城で私のペットとして過ごしているはずなのだ。それなの  
に、三日以上こっちにいたもんなあ。間違いなく脱走扱いされて探し回られているだろう。

「んじゃ、もう妙なことに巻き込まれんじゃねえぞ」

「いや、絶対に私は悪くないって!」

向こうからやってきたのをどう防げというんだ!

そんな私の訴えは無視され、ライは黒結晶を持つてふっと消える。神器だから、黒結晶を持つて  
も大丈夫ということなんだろう。

「俺たちも戻るぞ、アナスタシア」

「あつ、はい。じゃあ、ペンダントも戻って」

「はいはい」

ペンダントは気だるそうな返事をして、人間形態から元のペンダントの状態に戻った。

そして、私はエルクトお兄さまにお姫さまだっこされて、湖を後にした。

◇ ◇ ◇

さて、湖の問題をどのように解決するか。この街の領主が本当に事態を把握していなかったのなら、この街の人たちも知っているかどうか分からない。

でも、意外と街のことは街の人のほうが詳しくあったりするので、聞き込みを試みよう。

そんなわけで、私たちはまっすぐ屋敷に戻るのではなく、街を歩くことに。

まずは、近くのレストランで食事でもして、腹ごしらえをしてからいろいろな人に聞いて回ろう。あとはスイーツとかを食べ歩きたり、街をぶらぶらとウインドウショッピングしてみたりなんかしてもいいかも。

『聞き込みがついになつてない?』

ペンダントがツツコミを入れてくる。

『……………そんなことないよ?』

『だいぶ間があつたけど』

だって。だってさ。ロニスニルでは、せっかくの美食の街だったのに、ろくに美味おおいなものにもありつけずに街を出ることになつたんだよ!?

郷土料理なんて旅行の醍醐味だいごみの一つが、まともに味わえてないんだよ、こっちは!

『それは観光目的の旅行の場合であつて、君は王女として視察で来てるんだから、味わえなくても仕方ないんじゃないのか?』

『……………たどえそうだとしても、私は食べたい!』

視察であつても、それくらいのがままは許されてしかるべきではないか! 食欲は人間の三大欲求! それを満たさずして仕事はできぬ!

『……………食堂よりも、頭の病院に行ったほうがいいと思う』

普段のペンダントからは想像もつかない声のトーンに、私の気持ちは沈む。

いつもみたいな軽口ではなく、本気でヤバイと思われているときのトーンだった。絶対にドン引きされている。

『……………ごめん。ちゃんと現実見るから、そんなこと言わないで』

普段の、人を小馬鹿にする軽口よりも、今のほうが心に深く刺さった。

気分が沈んでいるところに追い討ちをかけるように、ぎゅつと頬ほほをつねられる。

もちろん犯人は――

「エルクトお兄さま、痛いです！」

もう！ 私の可愛らしいもちもちのほっぺが赤くなったらどうしてくれるんだ！

『可愛らしい……？』

そこは引つかからなくていいんだよ、ペンダント。

「さっきから呼んでいるのに返事をしないからだろう」

「だからつてつねらないでください。それで、なんの用ですか？」

「街の人間に話を聞くのだろうか？ それなら飲食店から回るぞ。知っているやつがいるかもしれない」

確かにあの湖は観光名所だから、観光客の出入りが多いところを優先的に回ったほうが効率はよさそう。

ご飯食べたいと思つてたからちようどいいし。

「わかりました！ 行きましょう！」

ようやく美味しいご飯にありつける〜！

◇ ◇ ◇

……そう思つていた時期が私にもありました。いや、ロニスニルみたいにご飯がおいしくないとか、そんなことはない。むしろ、お肉は柔らかいし、スープもいろいろな調味料が使われているしで、手間をかけて作られたのがわかる。わかる……んだけど。

「水の痕跡もなかったの？」

「ああ。単純に水が干上がったというわけではないだろう」

「父上に報告すべき案件ということですか」

「報告するには情報が足りない。だが、調査隊の派遣申請はしておいてもいいだろう。同行しているフォルティオール公爵に届けさせればいい」

エルクトお兄さまは、たまたまお店にいたハーステッドお兄さまとシルヴェルスお兄さまと話し合いをしている。

こんな空気でご飯なんか味わかるか！ さっきから全然喉を通らなくて、スープをちびちび飲んだり、お肉を齧ったりしてるだけだもん。

「アナ、どうかした？ 全然食べてないけど」

「いえ……なんでも」

それを言うなら、ハーステッドお兄さまたちもじゃないですかね。だって、食べてないどころか注文すらしてないもん。ここは食事をする場所なんですから、せめて何か食べようよ。

「ハーステッドお兄さまたちはなんでここに……？」

「兄上から聞いてない？ アナが湖のことを気にしてたから、僕たちも領主からいろいろと聞き出していたの」

「ああ……」

そういうえば、そんなことも言っていましたね。他の兄妹たちは街に聞き込みに行ってたんだけ？ 二人しかいないのは、まだ聞き込みが終わってないからなのかな。

どうやら、エルクトお兄さまはこの二人を探すために飲食店に入りたかったみたい。そういうことは事前に言っておいてほしいんですけど。

というか、確か闇魔法を使って領主を尋問してるって言ってなかった？ 話を聞くのが怖いんだけど。まあ、聞くけどさ。

「何か情報はあったんですか？」

「結論から言うと、領主は知ってたよ。でも、な〜んか変なんだ」

「変……ですか？」

私が首をかしげると、ハーステッドお兄さまもう〜んと悩みながら説明する。

「最初は知らないって断言してたのに、だんだん知らないはずって曖昧あいまいな言い方に、不自然に変化していったね。尋常じんじょうじゃない様子だったんだ。あのまま続けると心が壊れちゃいそうだったから、途中で切り上げたんだけど……」

「そこまできりながらも、完全には答えが変わらなかったのか？」

エルクトお兄さまも首をかしげると。

「そうそう。それに、あの領主に何か別の力が宿っていた感じもするんだよね。領主のものでも僕のものでもない、別の何か」

別の何か……？ この街の領主は、なんらかの魔法をかけられていたということなんだろうか。

「それって魔力ですか？」

「う〜ん……なんか違う気がする。でも、よくないもののは確かだから、アナは会わないようにしてね」

魔力じゃない何か……？ それって、一体何なんだろう？ この世界に魔力じゃない別の力なんて——いや、まさか？ まさか、そんなことがある？ でも、可能性がないとは言いきれない。

もしもそうだとすると、どうしてハーステッドお兄さまはそれに気づいたんだろう。

「その……よくないものっていうのは、どうしてわかるんですか？」

私がそう聞いたら、ハーステッドお兄さまの目が静かにそれていく。うん？ と疑問に思っしてシルヴェルスお兄さまやエルクトお兄さまのほうを見ると、二人もハーステッドお兄さまと同じように目をそらした。

えっ？ えっ？ 何か聞いちゃいけないことを聞きましたか？

「……やっぱり気になる？」

「そりゃあ、まあ……」

よくないものって曖昧な表現をされたら気になりますよ。この兄妹たちが曖昧な表現をすると  
きつて、だいたい隠し事をするときだからね。

「じゃあ、明日の朝にこの領地を出ていくって約束できるなら教えてあげる」

「えっ!？」

いや、確かにまだこの領地に留まっているのは私のわがままのせいみたいなものだし、ロニス  
ルでの滞在時間が延びたから日程も押しているとはいえ……

でも、明日の朝にというのは……まだ、原因不明の干上がりだけなら、私も仕方ないかって出  
いけるけれど、今回は神器が関わっている可能性がある。それなのに、街を離れてもいいものか。  
もしかしたら、何かの手がかりがあるかもしれないのに。

ただ、このままお兄さまのことを聞かずにいるのも嫌だ。私は、兄妹たちのことを、外からの評  
価以外は何も知らない。

向こうが話してくれないのなら、こっちから聞きに行かないと、永遠に知らないままで。

「……無理なら話は終わり。僕たちは屋敷に戻るけど、アナは観光したかったら兄上と回るといいよ」  
ハーステッドお兄さまは席から立ち上がり、それに釣られるようにシルヴェルスお兄さまも立ち  
上がる。

「ま、待ってください!」

私が引き留めると、二人は私のほうを振り向いた。

「わかりました。明日の朝に出ていくと約束しますから、今日の夜に教えてください」  
こうなったら、明日の朝までにどうにかしてみせる。

湖の問題は解決できなくても、黒結晶との関係くらいは突き止めなければ。

「わかった。それじゃあ、夕食の後に僕の部屋を訪ねてきて。時間は作っておくから」  
ハーステッドお兄さまはそう言うと、シルヴェルスお兄さまと一緒に店を出ていく。  
タイムリミットは夕食まで。それまでに絶対に暴いてみせる!

◇ ◇ ◇

街の人への聞き込みは、お兄さまたちがやってみたいだし、ハーステッドお兄さまやシルヴェ  
ルスお兄さまから特に何も言われなかったなら、たいした情報はなかった可能性がある。  
それなら、やっぱりさっきの湖をもうちょっと念入りに調べるところから……

『アナスタシア!!』

「はひっ!？」

急に脳内に声が響いて、私はすっとんきような声を上げてしまう。街の人にも聞こえていたのか、  
こちらの様子を窺うように見ている。めっちゃ恥ずかしい。

犯人はもちろん――

『ちょっとエルクトお兄さま！いきなり念話で大声を出さないでください！』  
 『お前が呼びかけに応じないからだ。つねるなど言われたからこうしただけだ』  
 それならまだつねられるほうがましだ。この方法は周りの視線が気になるということ以前に、心臓に悪いんだよ。

まだ心臓の鼓動は激しいままだし。

深呼吸してどうにか気持ち落ち着かせる。その間、エルクトお兄さまは素知らぬ顔だ。

『ひとまず、人目につかないところに行くぞ。話したいことがある』

『はい……』

なんか、毎度毎度エルクトお兄さまのペースに飲み込まれて、私ばかりが驚かされている気がする。いつかこの人のことをぎゃふんと言わせてやりたい。

『君には一生無理だと思っけど』

ペンダントの言葉は聞かなかったことにして、私たちは場所を移動した。

そこは、先ほどの湖があった場所。ここなら人が来ることはないだろうとのこと。

お屋敷に戻らないということは、他の兄妹たちにも知られたくないことなのか。

「屋敷に戻れば、もう外には出られんだろうからな」

「……また顔に出てました？」

私はいつになったらポーカーフェイスができるようになるんだ？それとも、お兄さまたちの察

知能力が高すぎるだけなのかな……いや、カイエンにもよく見抜かれるから、私のポーカーフェイスの技術不足だな。

いや、それは今はいい。お兄さまの言葉に無視するわけにはいかないことがある。

「外に出られないって、まるで閉じ込められるみたいな……」

「やつらならそれくらいはするぞ。俺と行動しているのが気に入らんだろうからな」

そういえば、神器たちも同じこと言ってたな。でも、神器のことを知ってるのはエルクトお兄さまだけだから、エルクトお兄さまに頼ってしまうのは仕方ない。

それに、本当に有能なんでもん、この人。神器たちがエルクトお兄さまのほうに期待をかけてるのも、納得はいかないけど理解はできるし。

「本題に戻るが、湖の件は落ちた神器とやらが関わっている可能性が高い」

「えっ、そうなんですか？」

まあ、黒結晶なんていう落ちた神器が生み出したものが落ちていたわけだから、その可能性もゼロではないと思っていたので、そこに関しては大きな驚きはなし。

でも、エルクトお兄さまはそれなりの確信を持っているように見える。一体なんだろう？

「湖でハーステッドお兄さまが、黒いもやが見えたと言っていたからな」

「……ハーステッドお兄さまがですか……」

確かにそう言っていたし、ハーステッドお兄さまの力のことを知っていそうな感じはしてたけど、

どうして濁すような言い方をするかなあ。どうせなら教えてくれてもいいのに。

「知りたいなら本人から聞け」

「何かあるんですか？」

どうしてお兄さまが言ってくれないのかくらいは教えてくれないうか。

「やつに限った話ではないが、自分のことを勝手に話されるのを嫌うからな。ただでさえやつらの当たりが強いのに、これ以上突つかかれても面倒だ」

それを言われると無理強いはできないな……当たりが強いのは私が理由だし。

「でも、なんで随った神器はそんなことをしたんですかね？」

「そのことは、俺よりもそいつに聞け」

お兄さまは私の胸元を指差す。そこにはペンダントがぶら下がっている。

まあ、普通は神器のことなら神器に聞きますよね。でも、なんとなく返ってくる答えはわかる。

『なんでだと思っ？』

『知らない』

でしようね。知ってたら途中から口を挟んできただろうし。

『まあ、心当たりはあると言えはある』

いや、心当たりはあるんかい！ それならもつと早く言ってくれてもいいんじゃないかな。

『あのときは金剣がいたからな』

『金剣……？』

金剣って、ライのことだね。ライがいることと心当たりを話さなかったことに、なんの関係があるんだろう？

『……いや、やっぱり君には話せない。金剣に伝わったら僕が怒られそうだし』

『えー!!』

そりゃないよ！ そんなこと言われたら気になって仕方ないのに！

『おし〜え〜て〜!!』

『うるさいな。言わないって言ってるだろ』

『私たちに協力するって言うならちゃんと話してよ！ 中途半端に言うことないじゃん!』

話す気がないなら、最初から知らないと言えればいいだけのこと。私の思考は神器たちには筒抜けで、神器たちの思考を私が読み取ることができないんだから、嘘をつかれたって私にはきつとわからない。

『君たちに協力するのは、断る理由がなかったからだ。それと、話すつもりはあったけど、今までの君の言動を考えてやめただけだ』

『だから、それはどうしてなの？』

『まず、僕も詳しく知っているわけじゃないから、すべて話せるわけじゃない。そして、君は中途半端なことを聞いたら、それを気にするんだろ。金剣のいるところであることを思い浮かべられた

ら、僕が話したことがバレるじゃないか』

それはそうかもしれないけど……でも、今回のことを話しちゃった時点でアウトなんじゃないかな？

『詳細は話していないから大丈夫じゃないかな』

『むう……』

さすがに私の誘導に引っかけたりはしないか。ここまで来ると、本当に話してくれないだろうなあ……気になるのに。

「ペンダントも知らないみたいですよ」

「そうか。なら、これ以上この場所にいても情報は得られないだろう。屋敷に戻るぞ」

「はい」

私はお兄さまに抱えられて屋敷に戻った。

◇ ◇ ◇

結局、湖の件は解決とは言えないまま中途半端な形で終わって、屋敷に戻ることになった。エルクトお兄さまによると、湖が枯れた原因について人為的な要因の可能性が出てきているため、正式に調査隊が派遣されることになるのではとの話だ。だから、私たちの調査はまったくの無意味とい

うわけではなかった。

ただ、領主のことも含めて神器がらみだとしたら、いつか私たちと再びなんらかの形で関わってくるかもしれない。そのときは必ず真相を突き止めよう。

エルクトお兄さまは、事の顛末<sup>てんまつ</sup>を他の兄妹たちに話しに行っているらしい。私はというと、約束通りハーステッドお兄さまの部屋を訪ねていた。

ハーステッドお兄さまはお茶の用意をして私を待っていた。

でも、なぜかルーカディルお兄さまも一緒にいる。一体なぜ？

「それで、調査は満足した？」

「まあ、おおよそは」

どうせなら解決したかったものの、それはできる人に任せるしかない。私は、墮ちた神器のことだけ頭に入れておこう。神器たちがしつこいから関わらないつもりだけど、普段から気をつけていないと、気づいたら巻き込まれてましたなんてことになりかねない。

私は大丈夫だったとしても、エルクトお兄さまが危ないパターンもある。リルディナーツさまの言っていた因果というものも、まだよくわかっていない。フラグに近いという話だったよね……

「それで、ハーステッドお兄さまの力について話してくれるって聞いたんですけど……」

私はルーカディルお兄さまのほうに視線を向けてしまう。

わざわざ部屋を訪ねてくるように言っていたから、てっきり私だけにこっそり教えてくれるのか